

第78回企画展 「東北地方の玩具たち —東日本大震災を忘れない—」

天理参考館学芸員
幡鎌 真理 Mari Hatakama

天理参考館では10月8日から11月27日まで、第78回企画展として「東北地方の玩具たち—東日本大震災を忘れない—」を開催する。東日本大震災の発生から5年が経過した今も、復興への道のりは続いている。2階及び3階常設展示室の一部コーナーにおいて復興支援展示を震災以来継続しているが、5年を迎え、関西の方々にも一層東北地方に関心を向けていただく意味からテーマを玩具に絞って資料をご覧くださいこととなった。

東北地方は「玩具王国」と言っても過言ではなく、郷土玩具が豊富に存在する。しかも、木、土、紙、いずれの素材も偏りがなく、それぞれ個性的である。緑豊かで、日本有数の山脈が東北6県すべてにまたがることから、木で作られた玩具の種類は他の地域を圧倒する。まず思い浮かべるのはこけしであろう。単に「木の人形」ではなく、轆轤くわだまを用いて木地師が作るのがこけしである。木彫の人形はこけしではない。“こけし”と聞いて思い浮かべる画像はおそらく人それぞれで、形や模様が微妙に違っているかもしれない。それは、こけしが11の系統に分かれているからである。要するに同じように見えて11種類あるということで、「こけしなんてみんな同じじゃないの」と思われた方はぜひ展示をご覧ください。他には山形県の笹野彫、福島県の三春駒、青森県の八幡駒など膨大な数にのぼる。

土は宮城の堤人形が代表格と言える。日本の土人形の原点は京の伏見人形と言われ、伏見稲荷大社の土で作られた人形は、持ち帰る途中でたとえ壊れても、自分の田畑に入れば豊かな実りを約束してくれる、それほど力を持つと考えられていた。3月の節供に飾る雛人形は伏見人形成立以前に作られているが、かつては上流階級や富裕層にしか到底手の届かないものだった。雛人形の原点をたどると、ひとがたになる。「人形」を何と読むだろうか。「にんぎょう」と読む場合が多いが、「ひとがた」でも正しい。3月初めの巳の日に、人のかたちに切り抜いた紙や木のひとがたで身体を撫でて息を吹きかけると自分の災厄や穢れがひとがたに移り、新しい清らかな自分に生まれ変わるのだと考え、そのひとがたは水辺に流した。目下の者が貴人に立派な撫物なでもの(=ひとがた)を献上したのが雛人形の始まりではないかという説もある。豪華な撫物を流すのは惜しい、残しておきたいと考えるようになったのかもしれない。江戸時代にはひとがたに似た姿の立雛から次々に新しい型の雛人形が誕生する。雛人形は古来変わらない伝統的な姿と思うかもしれないが、意外にも江戸中期から150年程の間に幾通りものモデルチェンジが繰り返されてきた。寛政2年(1790)に京の大榎屋が6寸(高さ20cm程度)の古今雛というスタイルの雛人形を2両2分で売り出した。江戸の職人の賃金が1カ月銭4~6貫文程度だったと言われた文政年間(1818~1830)、当時の1両は銭6貫文(1貫文は1,000文)なので、雛人形を買うには2カ月分以上の賃金が必要だったことになる。高価な雛人形を買えない庶民が、土や木や紙などの身近な素材で人形を作るようになるのは当然である。今回展示する堤人形の背面に「四百文」と墨書された土人形がある。質の違いはあるにせよ、



ほぼ同じころ5分の1以下の価格で手に入れられたことになる。そして「〇〇から〇〇へ」、「嫁入り」という墨書が残されている人形もあることから、当時贈答品として流通していたことがわかる。堤人形を範として山形の相良人形、岩手の花巻人形などが江戸時代に作られていく。この3つは東北の三大土人形と称され、それぞれ個性的で美しい。

手漉きの紙を木型に貼り付けて乾燥させてから抜く「張り抜き」の技術で作られるのが張子である。仙台張子、三春張子など歴史が古い。紙は高級品ではなかったのかと思うかもしれないが、玩具に使う紙は自分の家で漉き返した二番手の紙で、質を問わない。反古紙を、今で言う再生して使うので当時としては安価だった。繊維が強い上質の紙は、木型に貼り付けても反発してすぐ剥がれるようである。三春張子は土よりも造形の自由度が高いことを利用して躍動感のある姿に作られる。そして、土も紙も江戸時代の玩具に蘇芳の赤を用いるのが東北地方の特徴である。蘇芳はインドやマレーシアなどの熱帯産のマメ科の木で、飛鳥・奈良時代から日本に入っているが高級な染料だった。江戸時代の交易相手、「オランダ海上帝国」と呼ばれたオランダからの底荷に蘇芳の原木が積載され、長崎、大阪を経て石巻でも一部が荷揚げされたのかもしれない。経緯は不明だが、底荷としての役割を終えれば、蘇芳も安く入手できたと考えられる。

江戸時代の玩具は紙、土、木とも造形美にあふれ、当時の最先端の世相、お芝居の1シーンや流行の着物などを豊富に取り入れていることに驚かされる。玩具にまで反映されるということは、上方、江戸の情報に敏感で、現代同様最速で自分の領内に届けるシステムが、東北地方に整備されていたのだろう。

この東北地方を、江戸時代からの玩具を通じて今回の展示で紹介する。東北6県すべての玩具を木、土、紙の素材に分けて展開する。次号から個々の展示資料についてご紹介していきます。なお10月29日(土)、30日(日)の東北文化の日、11月19日(土)、20日(日)の関西文化の日は無料入館日。10月29日(土)と11月19日(土)は東北からこけし工人をお招きしてこけし製作実演をおこなう。関西で目にする機会の少ない轆轤挽きをぜひご覧ください。皆様のご来館をお待ちいたしております。